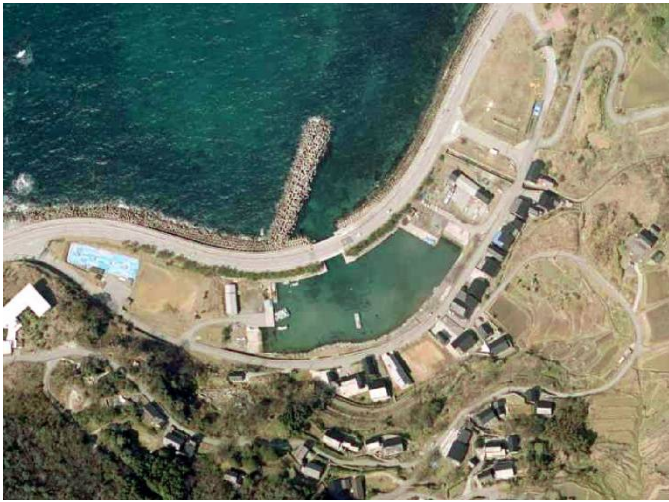


「能登半島の今 (6)」

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーション研究所

田中 千尋 Chihiro Tanaka

どんな土地でも、報道や写真で現地の様子のある程度想像することはできます。しかし、自分で足を運び、自分の目で見なければ実感できないことも多いものです。震災後の土地の様子もその一つです。更に、震災前と震災後の航空写真の比較は、直感的に土地の変化をつかむのに有効だと思います。



(国土地理院航空写真／震災前)

これは、震災前の能登半島北部の小さな港の様子です。四角い舟溜まりがあり、道路の下に舟の通路があったようです。舟も何隻か写っています。



(国土地理院航空写真／震災前)

同じ場所の震災後の写真を見ると、もともと水深のない舟溜まりだったのでしょう、わずか2mの隆起によって舟溜まりそのものが消滅しています。小舟が何隻か取り残されているのもわかります。



この先も海岸線には白く崩壊した崖が多数見られました。「地震の爪痕」といった表現がありますが、まさに「巨大な鉤づめ」で斜面がひっかかれたような、実に痛々しい光景です。



近づいてみると、このような状況です。表土(土壌)だけでなく、内部の岩盤まで崩落しています。更には、もともとあった崩落防止のコンクリート護壁まで崩れてぐにゃぐにゃになっていました。



能登半島北部の道路の崩落箇所は、数えきれません。道路のあった斜面そのものが崩落し、法面の修復が不可能な場所も複数ありました。もともと道のあった斜面をあきらめて、隆起した海岸側に仮設の道路を造っ

たところも、何か所かありました。この光景は、現在の能登半島北部の道路の状況を象徴しているように思いました。



震災は、有名な景勝地の様子も一変させました。これは曾々木(そそぎ)という集落の近くにある「窓岩」という特徴的な岩です。



(グーグルマップ／震災前)

震災前は、このように岩の隙間に穴があって、窓のように向こう側が見えていました。しかし地震で、岩そのものが崩落してしまったのです。



もともとトンネルや覆道のあった場所が崩落して、使えなくなったところもあります。



それを避けるために、海側に新道を造ってくれています。舗装はされていますが、幅員は狭小で、周囲の巨岩が圧倒しているので、走行に勇気が必要です。普通車同士でもすれ違うのがやっとで、ダンプカーなどが来ると、すれ違いが困難でした。ダンプは復興の重要な車両ですから、もちろんこっちが道を譲ります。



国道 249 号線は、現在こんなぐねぐねの細い道が延々と続いているのです。



時間帯や道路復旧工事の都合で、この道は頻繁に通行止めになるようです。幸い私が通った時には、輪島から能登半島北東端の狼煙(のろし)まで、一か所も通行止めがなく、無事に通過できました。